

博士学位申請論文審査要旨

申 請 学 位 名 称	博士（学術）
申 請 者 氏 名	大賀 祐樹
専 攻 ・ 研 究 指 導	地球社会論専攻 社会思想研究指導
論 文 題 目	ローティの思想における一貫性 The Coherence of Rorty's Thought

審查結果 合 格

	所 属	資 格	氏 名
主任審査員	社会科学総合学術院	教授	古賀 勝次郎
審 査 員	社会科学総合学術院	教授	東條 隆進
審 査 員	社会科学総合学術院	教授	後藤 光男
審 査 員	社会科学総合学術院	教授	厚見 恵一郎
審 査 員	政治経済学術院	教授	齋藤 純一

博士（学術）学位申請論文審査要旨

大賀 祐樹

『ローティの思想における一貫性

～その解釈学的側面について～

[1] 論文の主題

本論文は、アメリカのユニークな政治思想家リチャード・ローティ（1931 - 2007）の思想の全体像を捉えるとともに、その底に流れる一貫性を明らかにしようとしたものである。ローティは、哲学をはじめ政治思想、道徳、文学、宗教など実に多くの分野を扱っていて、その思想は極めて複雑で錯綜しているように見える。そのため、少なくとも日本におけるこれまでのローティ研究は、各分野の専門家がそれぞれの研究分野の視点から研究したものが多く、ローティ思想の全体像を明らかにしたものは無かった。だが、ローティ思想の意義が、単に個々の分野における興味深い議論だけでなく、その全体の構造にもあるとすれば、本論文がローティ思想の全体像を明らかにしようとしたことは、非常に大きな意味を持つ企てといえることができる。

また、ローティの思想が複雑で錯綜しているのは、ローティが英米の思想・思想家だけでなく、ヨーロッパ大陸のも扱っているからである。これまでの欧米の哲学の世界では、英米哲学と大陸哲学とがあって、互いに自らを主張し相容れないものであるかのように理解されてきた。もっとも、既に H・アレントは、大陸哲学から決定的な影響を受けていたけれども、英米の政治思想と対話を行い、独自の政治哲学を展開していた。アレントとは逆に、アメリカ思想から出発していたローティは、大陸哲学と会話を重ね、ハイデガーやガダマーなどから多くを学んだ。そしてローティはアメリカの「プラグマティズム」とガダマーの「解釈学」に親近性を見出した。本論文は、そこにヒントを得て、ローティ思想の一貫性の問題を究明するのである。

1970 年代以降、アメリカをはじめ世界の政治哲学を主導してきたのは J・ロールズだったが、ロールズが 1993 年に刊行した『政治的リベラリズム (Political Liberalism)』は、ローティの思想と重なるところがあって、ローティ思想への関心を大いに高めた。以来、何れかといえば、ローティの思想の方により注目が集まるようになり、国の内外でローティ研究が俄かに盛んになった。本論文もそうした流れの中にはあるが、しかし他のローティ研究には見られない独自の視点・解釈が随所に見られ、ローティ研究に新しい地平を切り拓いている。

なお、本論文は昨年(2009 年)出版した著書『リチャード・ローティ:リベラル・アイロニストの思想』(藤原書店)に第 10 章「ローティの文学論」と第 11 章「ローティの哲学における解釈と真理」の 2 章を加えたものである。

[2] 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。なお、本論文の分量は、1 頁 47 字 × 32 字 = 1504 字

で、全 187 頁（脚注を含む） 約 28 万字である。

目次

はじめに

第一部 ローティの哲学における出発点

第 1 章 ローティの生涯と思想形成

- 一 社会的正義の英才教育
- 二 プラトンの哲学からプラグマティズムへ

第 2 章 認識論的転回と言語論的転回

- 一 『言語論的転回』におけるローティ思想の萌芽
- 二 「自然の鏡」という問題提起
- 三 認識論への批判的考察
- 四 消去的唯物論から認識論的行動主義へ

第 3 章 解釈学的転回

- 一 言語論的転回における問題
- 二 根底的翻訳と根底的解釈
- 三 「会話」としての哲学

第二部 思想の展開～ネオ・プラグマティズムと政治への参加

第 4 章 偶然性のリベラリズム

- 一 リベラル・ユートピア
- 二 自由における必然性と偶然性
- 三 可謬性と偶然性
- 四 消極的自由と偶然性

第 5 章 「残酷さと苦痛の減少」と「公と私の区別」

- 一 恐怖のリベラリズム
- 二 功利主義における「苦痛の減少」との比較
- 三 ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム
- 四 ローティによるリベラリズムの再構築

第 6 章 プラグマティズムとネオ・プラグマティズム

- 一 プラグマティストとしてのローティ
- 二 ローティのプラグマティズムの源泉
- 三 ローティはどこまで「デューイ主義者」なのか？
- 四 ジェイムズの宗教論とローティのプラグマティズム

第7章 プラグマティズムと「脱構築」

- 一 「脱構築」の思想
- 二 ローティとデリダの対話
- 三 ローティの政治思想とラディカル・デモクラシーとの対比

第8章 ローティの左翼論とその源流

- 一 ローティによるアメリカ左翼の分類
- 二 左翼の連帯
- 三 改良主義左翼としての「オールド・レフト」
- 四 「ニュー・レフト」の隆盛と挫折
- 五 ローティの<9.11>以後

第9章 ローティによる道德思想の再生

- 一 ローティの道德論
- 二 ローティとヒューム的な道德思想
- 三 ローティの人権論

第三部 ローティの思想を貫くものとしての「解釈学」と「物語」

第10章 ローティの文学論

- 一 ローティにおける「物語」という用語の使い分け
- 二 ローティの“深読み”
- 三 文学愛好家としてのローティ

第11章 ローティの哲学における解釈と真理

- 一 解釈学の放棄?
- 二 二つの解釈学
- 三 隠れた本流としての解釈学

第12章 物語論的転回

- 一 ローティの思想と「物語」
- 二 ローティの思想において一貫していたもの
- 三 ローティの現代的意義

あとがき

参考文献

[3] 各章の概要

本論文は三部から構成されている。

第一部

第一部は、1979 年に刊行された主著『哲学と自然の鏡 (*Philosophy and the Mirror of Nature*)』に至るまでのローティ哲学の形成過程と、その後展開されるユニークなローティ思想の出発点を探っている。

第 1 章は、ローティの生涯を伝記的に記述することによって、ローティ哲学の出発点とその形成過程を追っている。本章では、ローティ哲学の出発点は、ローティの生い立ちに、即ち両親や周辺の人々の知的環境に求められている。両親は初め共産主義の支持者で、後に社会民主主義を志向するようになるが、生涯を通して、労働運動などを支援し社会正義の実現のために闘った。両親の周辺にいた知人・友人たちも、同様な思想を持った人々で、その中には、後にローティが最も大きな影響を受けることになる J・デューイもいた。少年期のローティは、両親たちのそうした姿を見て、自分も社会正義の実現に身を投じようと考えたが、他方では、神秘的な趣味、例えばチベット仏教や野生の蘭などに興味をそそられた。ローティは、両者の間で悩み、両者の合一を目指して哲学に志したという。続いて、大学入学から最晩年までのローティの思想形成と確立が手短かく書かれているが、それらは、以下の章で詳しく論じられることになる。なお資料としては、自伝的論文「トロツキーと野生の蘭 (*Trotsky and the Wild Orchids*)」、『アメリカ未完のプロジェクト (*Achieving Our Country*)』の一部、それにインタビューなどを用いている。

第 2 章は、『哲学と自然の鏡』が西洋哲学史上どのように位置づけられるかを明らかにしようとする。ローティは 1967 年に出版した編著『言語論的転回 (*The Linguistic Turn*)』によってやや注目されるが、傑出した思想家として認められるようになるのは『哲学と自然の鏡』を刊行してからである。ところで、同著のタイトルが示しているように、古代ギリシャ以来、西洋の主流をなしてきた哲学は、自然だけでなく本質・本性の意味をも持つ Nature をそのまま映し取る鏡であることが求められてきた。もっとも、ギリシャ哲学、それを継承した中世キリスト教神学と、近代の哲学との間には、重要な転回が認められる。それは、デカルトが行った認識論的転回で、それまでの永遠・不変の存在を問う主題から、そうした存在をいかにして客観的に認識できるかという主題の転回があった。だが、デカルトの認識論哲学も、古代ギリシャ哲学以来のものと根本的なところでは変わっていない。また、19 世紀後半から 20 世紀初期に、言語論的転回を行ったフレーゲ、ラッセル、前期ウィットゲンシュタインなどの哲学も本質的には同じである。

第 3 章は、第 2 章の続きである。言語論的転回によって新たに切り拓かれた言語哲学も、クワインやデイヴィッドソンなどによって、その内部から批判を受け、再び大転換する。それと同様な動きは科学哲学においても見られ、クーンやハンソンなどによって推し進められ、そしてローティは彼らの思想を受け入れることによって、独自の思想を展開するようになった。ローティによれば、クーンなどは伝統的な「自然の鏡」を希求する西洋の哲学の在り方を掘り崩し

たのである。そうした動きは、デカルトなどから派生した「心身問題」が、ライルや後期ウィトゲンシュタインなどによって解消されたこと、また、プラトンの真理論が、ニーチェ、ハイデガー、デリダなどのヨーロッパの思想家や、ジェイムズ、デューイなどのアメリカのプラグマティストなどによって解体されたことと軌を一にしている、とローティは考える。そうして、こうした哲学を解釈学的転回をといい、ドイツの哲学者・ガダマーの解釈学と重なるところがある。つまり、『哲学と自然の鏡』は、クーンが「科学史」において行ったことを「哲学史」において成し遂げたのだという。

第二部

第二部は、それまで、主に哲学の問題を扱っていたローティだが、1989年に『偶然性・アイロニー・連帯 (Contingency, Irony, and Solidarity)』を、更に1998年には『アメリカ未完のプロジェクト』を刊行し、積極的に政治を論ずるようになるが、本論文第二部で、それまでのローティの哲学と、後に展開される政治論の間には、連続性・一貫性が見られることを論証する。

第4章は、ローティの哲学とリベラリズム擁護がいかにして両立しているかを検討している。ローティは自ら考える理想的社会を「リベラル・ユートピア (Liberal Utopia)」¹⁾、その住民を「リベラル・アイロニスト (Liberal Ironist)」と呼ぶ。リベラル・アイロニストは、私的な価値観としてはアイロニストの思想を容認するが、政治制度としては自由主義、民主主義を擁護する人物のことである。ローティはこうした私的な価値観としてのアイロニーを政治という公的な場に持ち込まない。リベラル・ユートピア社会では、哲学は自己の在り方を記述する語彙となり、決して「真理」に近づくためのものではない。このような社会は、カント的自由主義よりも、ミルの・バーリニック的な自由主義に近い。後者の自由主義においては、偶然性や可謬性が認められているからである。

第5章は、ローティが自由主義の出発点とする「残酷さと苦痛の減少」とローティに見られる「公」と「私」の特徴について考察している。本論文は、前者の議論を際立たせるために、シュクラーと功利主義と比較する。もともと前者の議論は、シュクラーの「恐怖のリベラリズム」から影響を受けて展開されたものであるが、普遍主義的な哲学やドグマに懐疑的である点では、両者は共鳴し合っているものの、ローティの自由主義が「希望」を掲げているのに対して、シュクラーのそれは正反対の方向を向いていて、異なっている。功利主義との比較では、苦痛を最小に快楽を最大にさせる功利主義に対し、ローティは後者については賛同しない。また、ローティの「公」と「私」の区別の特徴は、1、ミル・バーリニックの意味での「消極的自由 (negative liberty)」を重視している点で自由主義、2、私的な価値を実現する場は私的空間に限定され、公的空間では好ましくないと考えられている、ところに見出される。最後に、ローティの自由主義が、ロールズの「政治的自由主義 (political liberalism)」と親近性を持っているこ

とを指摘している。

第6章は、ローティの立場である「ネオ・プラグマティズム」を伝統的な「プラグマティズム」と比較し明らかにしている。伝統的なプラグマティストとしては、パース、ジェームズ、デューイが挙げられている。「プラグマティズム」という用語を造語し、カントの定言命法より仮言命法を重視し、論理的な可謬主義を説いたパースだが、プラトン・カント的な哲学から免れていないとして、ローティは余り評価しない。これに対して、ローティはジェームズやデューイを評価するが、それは彼らの哲学の中に、ヘーゲル、ガダマー、あるいは「ポストモダン」の思想と共通するものが見られ、ジェームズ＝ニーチェ、デューイ＝ハイデガーという図式を作り、いざや、ジェームズとデューイの方がニーチェやハイデガーよりも高く評価されるべきだ、とローティは論ずる。そして、ローティは、自分はデューイの弟子とまでいうが、これに対して本論文は疑問を呈し、ローティの真理観はジェームズの宗教論におけるそれに近いという。

第7章は、ローティと同時代のフランスの哲学者・デリダの「脱構築 (deconstruction)」の思想とローティの思想を比較し、ローティ思想の持つ現代的意義を考察している。デリダの脱構築は、ハイデガーが企てた西洋形而上学の「解体 (Abbau, Destruktion)」をより徹底したもので、古代ギリシャ以来の哲学を「現前の形而上学」と捉え直し、デリダはその脱構築を行ったとされる。英米哲学は、フレーゲ、ラッセルなどによって体系的哲学として始められた言語哲学が、クワイン、後期ウィットゲンシュタインなどによって解体され、デイヴィッドソン、そしてローティ自身によって徹底されたと理解しているが、それと同じような過程を大陸の哲学も辿っていて、フッサールの体系的哲学がハイデガーによって解体され、それをデリダが徹底した、とローティは理解する。従って、ローティにとって、デリダは大陸のアイロニーの思想家ということになる。だが、ローティとデリダの間には違いも見られ、1993年5月、パリで開かれた「国際哲学カレッジ」におけるローティとデリダも参加した「脱構築とプラグマティズム」というシンポジウムでも、大きな論争となった。クリッチリーなどは、デリダの脱構築は「基礎づけ」や倫理や政治に関わるものだとして論じた。これに対して、ローティは、哲学と政治の区別、公と私の区別こそが、アイロニーの哲学と近代的民主主義の擁護の両立を計る上の要であり、そうすることによって逆に現実の政治へのコミットが可能になると主張する。最後に、ローティの政治思想とムフやコノリー、アレントなどのラディカル・デモクラシー、闘技的民主主義との比較を行っている。

第8章は、1998年の著作『アメリカ未完のプロジェクト』を中心に、ローティの独特の左翼論と、その源流であるアメリカ左翼の歴史を考察している。長い間、哲学に没頭していたローティも、思想が成熟したこともあり、漸く60歳半ばになって、幼少の頃から関心を持っていた政治と哲学とを架橋し左翼論を展開した。ローティが左翼論を展開することになったキッ

カケは、政治的左翼の衰退に対する危機感を抱いたからである。ローティはアメリカの左翼を、「改良主義左翼」、マルクス主義的な「新左翼」、「文化左翼」の三つに分類する。現代のアメリカでは、新左翼運動が失敗したため、現実政治から乖離し、エネルギーを理論的・思想的な議論に費やし、大学の文学部だけを拠点とする「文化左翼」が主流になっているが、ローティは、そうした左翼の現状を危惧し、ローティの両親やその周辺の人々がかつて闘った改良主義左翼に回帰すべきだと説く。アメリカの改良主義左翼は、19世紀から存在しマルクス主義とは異なる現実的な手法で労働問題などの解決に取り組んできたもので、ニュー・ディール政策やニューフロンティア政策なども、ローティはその中に含めている。学生運動や反戦運動の過激化により、左翼が市民の支持を失ったため、マルクスの代わりに、フロイトやフーコーなどの哲学を社会理論に応用しようとする文化左翼が登場したのだ、とローティは言う。最後に、〈9・11〉以後のローティの対応について触れている。

第9章は、ローティの道德論を、特にヒュームを代表とするスコットランド学派のそれと比較し考察を加えている。ローティは現代社会における人間像として「リベラル・アイロニスト」を提示するが、道德論もそれと密接に関連している。即ち、個人の「良心」は普遍的・必然的なものではなく偶然的なものであって、社会における道德は、他者の「残酷さと苦痛」に対する「共感(sympathy)」によって人々が連帯し、それらを可能な限り減少させることによって、形成される。それはカントの道德論とは相容れないが、スコットランド道德哲学とは重なる部分があり、とりわけヒュームの道德論との類似性が大きい。それは、ヒュームの立つ「穏健な懷疑主義」とローティの「アイロニー」が「可謬主義」と一致しているという哲学的親近性からきている。それは、スコットランド学派が道德の源泉を「理性」よりも「感情」に求めている、しかも共感を強調しているからである。最後に、ローティの人権論が取り上げられている。

第三部

第三部は、「物語」をキーワードとして、多くの領域を論じたローティの思想の一貫性と、その現代的意義を考察している。

第10章は、ローティの諸著作に散見される文学への言及を集め、文学の解釈を自己の思想においてどのように利用しているかを通して、ローティの「解釈」の手法を検討している。そのためのキーワードとして、「物語」と「アイロニー」が上げられている。ローティは物語を、1、道德的な効用を持つものとしての物語、2、偶然的な思考を重視するものとしての物語的思考、という二つの使用方法をしている。1の代表としてはオーウェルの『1984年』、2の代表としては、ブルーストの『失われた時を求めて』が上げられている。アイロニーを重視するアイロニストでは、最初から物語を紡ぐ文学者の方が哲学者よりもアイロニスト的である。従来の文献学においては、作者がテキストに込めた真の「意図」が一つだけ存在し、それを正しく読解することが解釈の目的とされてきたが、ローティはそれに反対し、テキストは自己の関心に従

って「利用」すべきだとする。しかしこれに対しては、U・エーコは、そうしたローティのテクスト解釈は「過剰解釈」であって、ローティのようなテクストの利用は慎むべきだ、と批判している。

第 11 章は、ローティにおける「解釈学」という用語の使用とその放棄の問題を検討し、ガダマーの解釈学とローティのネオ・プラグマティズムの関係を考察している。主著『哲学と自然の鏡』の結論部分で、ローティは、哲学は体系的なものから啓発的なものへ変化し、解釈学が重要な位置を占めることになると主張していた。だがその後、解釈学という用語は使われなくなった。ローティが最も高く評価しているのは、ドイツのガダマーだが、クーン、クワイン、デイヴィドソンなどの思想もアメリカにおける解釈学的な思想として論じている。両者は、「事実と価値の区別」の撤廃という点で類似していて、解釈学とネオ・プラグマティズムとは地続きであるといえる。つまり、解釈学という用語は使われなくなっても、ネオ・プラグマティズムの底に「隠れた本流」として流れ続けていたという訳である。しかし、ローティとガダマーの間にも違いがある。例えば、ローティの真理の議論では、記述は「増殖」するが、ハイデガーの真理論を継承しているガダマーでは、複数のヴァージョンの記述を「融合」させるところに重心が置かれている。

第 12 章は、本論文の最終章として、ローティ思想の現代的意義を「物語論的転回」に求め、その論証を行っている。ローティ自身が経てきた「言語論的転回」、「解釈学的転回」という言葉使いに倣って、執筆者自身が名付けた名称だが、ローティの著作の中に頻繁に出ていて、ローティ思想の現代的意義を示す最も重要な言葉である。ローティは 100 パーセントでなくとも、それに近い「正しさ」を保持していれば「真理」として信用してよいのではないかと、そういう意味で「物語」を積極的に肯定する。ローティがそのように論ずる背景には、自然科学においてさえ、クワインの全体論が示すように、事実と完全に一致することが不可能であること、また、プラト的な真理観が解体された後に現れた「ポストモダン」状況の中で、極端な相対主義が現れてきたことがあった。そこでローティは、自文化主義を提唱するのだが、「残酷さと苦痛」回避というミニマムな自由主義の原則さえ守れば、寧ろ自らの「物語」を自由に紡ぐことができると説くのである。

[4] 分析と評価

< 各章の分析と評価 >

第一部

第 1 章・ローティが哲学研究に向かう動機についての議論が簡明かつ的確に記述されている。分析哲学の研究を始めてから、最晩年までのローティの思想形成と確立が手短かにまとめられていて、続く各章の理解を助けている。シカゴ大学時代、レオ・シュトラウスから何か影響を受

けたのか、知りたい気もする。というのは、第5章でホッブズ解釈をめぐる、シュクラーとシュトラウスとが対比されているからである。ローティの生涯に関する文献は、最近かなり出ているが、本論文執筆時点まで出版されたのは殆どないにも関わらず、ローティの生涯の節目は的確に捉えられていて遺漏がない。

第2章・1967年の編著『言語論的転回』に付したイントロダクションを重視し、ローティのその後の哲学的思索の出発点としている[注(2)を含めて]が、正鵠を射た指摘である。ローティの初期の論考に見られる心身問題に対する議論、また、その後の経過、つまり認識論的行動主義から非還元的物理主義へと変わっていった経過などの記述はよく整理されている。クーンが『科学革命の構造』で行ったような科学史の見方を「非ホイッグ的」としているが、どういう意味で言っているのか、いまひとつ理解し難い。認識論的転回を議論しているところで、ヒュームをデカルト、バークリ、カントなどと並べているが、デカルトやカントなどの言う nature に本質という意味があるのは当然だが、ヒュームの human nature の nature は本質という意味は持たず、寧ろローティの nature 概念に近いのではないか[これについては第12章でも同じように議論されている]。

第3章・クーン、クワイン、デイヴィッドソンの立場の違いがよく記述されている。クーンやクワインなどの議論の背景に、当時の物理学、特に量子力学の発展の影響というものは無かったか、そのところの議論もあってよかったのでは[第12章の注(7)には、量子力学という名称は出ているが]。ローティはオークショットの「会話」の考えを受け容れているが、オークショットの政治的立場は保守といわれ、ローティは改良主義左翼で、そうすると、思想と政治との間には因果関係は無いということになり、そうっていいのか。注(19)で、ローティのガダマーの援用に対するウォンキの批判文が引かれているが、ウォンキの批判は、ローティとオークショットの間にもいえないか。

第二部

第4章・J・S・ミルと可謬主義やバーリンと消極的自由についての議論は、極めて詳細で説得力がある。ローティの「公」と「私」の区別の議論については、コノリーをはじめ多くの批判があるが、そうした批判に対する言及が無いため、ローティの議論が平板に論じられている。必然性としての人間の自由の議論では、プラトンとカントが上がっているけれども、ヘーゲルやマルクスは入らないのか。ローティのいう「地球連邦」、ローティが言及しているテニスの「人類の議会」(『アメリカ未完のプロジェクト』日本語版への序文)を、将来実現すべきものとしているが、これはグローバル化している経済機構と同じ次元で論じられているようだが、果たしてそれでよいのか。キルケゴール(ロマン的アイロニーを人生の虚無と戯れるものとして拒否する)のアイロニーとの比較もしてほしかった。

第5章・ローティの「リベラル・ユートピア」が希望を掲げるものであるという議論は、説

得力がある。ローティとシュクラの比較を行っているが、自由主義が法や法制度と密接な関係を持っていることからいえば、シュクラの強みは法・法制度と強い関係を保持しているところであって、そうした関係が無いところに、ローティの弱みがあるのではないか。「ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム」における「バザール」と「クラブ」という考えは、ロールズの「政治的リベラリズム」の影響を受けているというが、ロールズの議論への言及が少なく、やや物足りない。少数派と思われるが、いまだロールズには転向は無かったという論者がいるのだから。

第6章・ローティ自身が最も大きな影響を受けたというデューイとローティとの類似点と相違点が詳細に論じられていて評価できる。言語哲学が席捲していたアメリカ哲学界にプラグマティズムというアメリカ特有の思想を、独自の仕方で復活させたというローティについての議論はよく整理されていて分かりやすい。ハイデガーのローティへの影響は、考えられている以上に大きいと思われるが、注(11)は、ローティのハイデガー評価の変化に触れているが、その理由についてもう少し言及する必要はなかったか。ジェームズの「純粹経験」を言うなら、ベルグソンや西田幾多郎の名前が自ずと浮かぶが、ジェームズとローティの強い類似性を説くなら、少なくともベルグソンには論及すべきではなかったか。デューイのプラグマティズムは「ダーウィン化されたヘーゲル」とされるが、デューイそしてローティはダーウィンの進化論をどのように理解していたか、もっと詳しい議論がほしかった。

第7章・最後のところで、アレントの公的領域はローティのいうクラブに相当すると考えることもできると論じているが、誤解ではないか。フーコーとデリダの違いが言及されている箇所があるがもっと議論してほしかった。『アメリカ未完のプロジェクト』の「日本語版への序文」で、ローティは、「今日では、急進主義者と改良主義者との分裂は、ハーバーマス派の人々とフーコー派の人々の分裂である」といっていて、ローティがフーコー、フーコー派に非常な関心を持っているので、クリッチリーによるデリダの民主主義への言及はなされているが、実際デリダは民主主義についてどう語っているのか、そこが分からなければ、ローティとの実質的な比較は難しいのでは。

第8章・アメリカ左翼史とローティの左翼論は、要領よく記述されている。しかし、スウィージーやラディカル・エコノミストなど左翼の経済学者への論及が無く、少し物足りない。また、ローティはユーロ・コミュニズムをどう評価していたのか、聞きたいところだ。「ニューヨーク知識人」内部における冷戦政策に対する肯定者と反対者の論争は、学問的にも興味あるものだが、殆ど論及されておらず、いささか不満である。ローティは、自分とウォルツァーは思想的に近いと考えているようだが、かなり違うのではないか。訳語の問題だが、「認識」(recognition)の政治とあるけれども、「承認」の政治ではないか。

第9章・スコットランドにおける共感論の歴史は簡潔によく描かれている。「最大多数の最大幸

福」ということを最初にいったのはハチスンだが、ベンサムとは違った意味でいったはずで、その辺りについての説明がほしかった。ローティは、ヒュームのように「感情」と「理性」を排他的に峻別しなかったとしているが、ヒュームの理解としてどうか。ヒュームも厳格には区別していないのだから。ヒュームやスミスは「共感の限界」を認識していて、「一般的ルール」や「公平な観察者」といったもので克服しようとしたのであるが、ローティでは明確でないようだが、その点もう少し論及してほしかった。

第三部

第10章・ローティは、まとまった形では文学論を展開していないが、ローティ思想の一貫性を把握するには文学論は逸し得ないとした、本論文の執筆者の直感は当たっていたといえよう。しかし、執筆者は、ローティの「勇み足」も認め、作者の合理性＝作者の意図として、少なくともその存在は認めるべきだと、ローティを批判しているが、的確な批判といえる。1990年にケンブリッジ大学で行われた「解釈と過剰解釈」というテーマを議題にしたエーコの講演会について詳しく言及されていて、ローティとエーコの同テーマをめぐる考えの違いがよく理解される。ウォーンキに拠りながらも、ローティとガダマーの「解釈」や「教養」の概念の違いが適切に指摘されている。また、クリストファー・ノリスに拠りながらも、ローティとデリダの思想の違いを簡潔に整理している。

第11章・ローティのネオ・プラグマティズムはヨーロッパの「大陸哲学」の視点を取り入れているが、この点に関して、本論文は詳細に論じている。そして、ガダマーの「解釈学」という用語は使われなくなったが、ローティのネオ・プラグマティズムの底には、隠れた本流として流れ続けてきたとする結論はかなりの説得力を持っている。しかし、大陸の解釈学には長い歴史、即ち、中世の聖書読解の技法以来の歴史があり、そうした歴史を論じないで直ちにガダマーを持ってきて論じるだけでよいのか、という疑問は残るが。ローティが「實在」や「世界」をどう考えているかに関して、パトナムの「内在的實在論」、「バークリの観念論」、また、グッドマンの「多くの世界」論などと比較検討していて、そのため、ローティの考えがかなり明瞭に捉えられていて評価できる。

第12章・ローティ思想の独自性を「物語論的転回」に求め、ローティ思想の現代的意義が明快に論じられていて評価できる。物語を両義的で脱構築的なもの、毒と薬が入り混じった「パルマケイアー パルマコン」でもある、と表現しているがよく理解される。ローティのパルメニデス解釈とハイデガーのそれとは違うようだが、どうか。注(15)で、ケインズのニュートン論に言及されているが、この問題は非常に重要であるので、ケインズの論文(「人間ニュートン」など)だけでもよいので取り上げ、もっと詳しく論じてほしかった。

<公聴会での質疑応答>

6月22日(火)に開かれた公聴会における質疑応答は以下の通りである。

Q: ローティの「公私の区別」とアレントの「公私の区別」の比較について。P111-2において述べられているが、ローティの「クラブ」とはアレントの言うところの「親密圏」にあたるので、「クラブ」の中における「他者性」という表現は妥当ではないのではないか？

A: この箇所は、「クラブ」のサイズが大小様々あり、一つの価値を規準とした「クラブ」の中でもその成員はまた別の異なった価値によって対立し得る可能性を持つのではないかと、という解釈を示したものである。ある「クラブ」の中において、その「クラブ」が規準とする価値と別の価値において別の「クラブ」が形成されるということもあり得るだろう。そのため、「クラブ」のサイズや形は柔軟なイメージで捉えるべきである。

Q: P132 にヒュームが「理性」と「感情」を完全に峻別した、という記述があるが、この理解は誤りではないか？

A: 「完全に峻別」という表現は確かに過剰な表現かもしれない。この表現はローティが道徳を論じる際に理性を高度に発達した感情の一種であると考えている点と対比するためになされたものである。

Q: ローティの言う「エスノセントリズム」は自分の視点が限定されているということを示すものであり、他者を自文化のもとに引き入れることに対しては肯定的だが、逆に自分は他者の文化にどのように影響されるのか？ローティは異質な他者を承認するテイラーやコノリーと違い、他者へのリスペクトが欠如しているように思えるが、その点についてはどのように考えられるのか？

A: ローティはアメリカ的な自文化を積極的に肯定していて、現時点ではそれが最良のものであるとしている点においてはある意味では限界がある。ただし、もしもローティ自身がアメリカ的な自文化よりもより良いと思えるボキャブラリーに出会ったとしたら、その時は積極的に他者の影響を受けるのではないかと考えている。

Q: P83 においてローティの政治思想と多文化主義的な政治思想との比較を行なうことを試みているが、全体的にその論点に対する議論が不十分である。テイラーやコノリーの政治思想との対比を行なう研究がもっとなされていた方がよかったのではないかと？

A: 今後の課題として、テイラーやマッキンタイアーのアイデンティティーについての考え方や善についての考え方とローティ的な考え方との比較を行いたいと考えていたところなので、その点をより充実させていきたい。

Q: ローティの思想の一貫性として「プラグマティズム」と共に「解釈学」を上げているが、何故より一般的なプラグマティズムよりも敢えて解釈学を強調するのか？

A: 『哲学と自然の鏡』においては結論として解釈学の重要性が論じられているのに、それ以降、より政治思想に関する言及が多くなった際には、解釈学がほとんど言及されなくなった。

ローティの哲学と政治思想の議論が基本的に一貫しているのに対し、明らかに一貫していないように見えるこの点を考察してみたところ、逆に「ネオ・プラグマティズム」の源の一つとして解釈学が重要な意義を持つことが分ったためである。

Q： テイラーやマッキンタイアーが「地平の融合」によって「共通善」を志向するのにに対し、ローティは価値観の無限の「増殖」を志向している点において異なっているように思える。無限の増殖という点で、ダーウィニズムの影響が大きいのではないかと考えるがその点に対してはどう考えるか？

A： テイラーやマッキンタイアーとの比較については、今後より力を入れて研究していきたいと考えている。論文の中ではあまり言及できなかったが、ローティは随所にプラグマティズムにおけるダーウィンからの影響を論じており、その影響は大きいと思われる。理性を高度に発達した感情の一種と考える点もまさにダーウィンからの影響によるところである。

Q： ローティは「人権を西洋が生んだ文化」の一つとする、「哲学的な基礎づけ」のない人権を論じているがこれについてはどのように評価するか？

A： 哲学的な基礎づけのある人権論の場合、自分の価値からすると理性的に見えない他者を「人間」として扱わない問題がある。ローティのように他者の苦痛への共感をきっかけとする道徳、人権論の場合、自分と同じ苦痛を感じ得る存在としての人間として、価値観の離れた人に対しても「人間」として扱うことが可能となる利点がある。

Q： フランスの「公教育の場」においてイスラム教徒の女子生徒がスカーフを着用することが禁じられるという問題があるが、ローティならばこの問題に対してどのように考えるだろうか？

A： ローティは公的な場において他者に苦痛を与えることを禁じ、自分にとっては堪え難いような存在を見せつける他者に対しても、「ビジネスライク」に接することによって敢えてその差異を「無視」するように論じている。そのため、スカーフの着用の自由は認めるが、それを禁止するのではなく、寛容に無視するべきだと考えるのではないか。

Q： ヒュームやジェイムズ等の思想はそれぞれイギリス的な思想的伝統に根ざしたものであり、ハイデガーやガダマーはヨーロッパの思想的伝統に根ざしたものである。両者はそれぞれ、市民的自由を勝ち取るためや、ヨーロッパ精神の危機との厳しい「対立」とその必要性から生み出された思想である。それに対し、ローティの思想はそのような「対立」と必要性が見えにくく、突然その両者を結びつけていて飛躍しているように見えるがそれは何故か？また、マルクスとの関係はどのようになっているのか？

A： ローティの場合、イギリス・アメリカ的な思想とヨーロッパ的な思想が相互に相手を「哲学」として認め合わないほどに断絶している現状に対して、むしろそれらの思想は別々の伝統を汲みながらも、実際には同じような発想に至っていると考え、その類似している部分を、脈

絡を関係なく繋ぎ合わせるという特徴がある。敢えて、伝統や文脈を無視してしまうということにローティの思想の良さがあるのではないかと考えている。

Q： P24 において、『哲学と自然の鏡』とは哲学史を「非ホイッグ主義的」に記述したものとする表現があるが、逆にローティ的な哲学史のシナリオに近づけるための「超ホイッグ主義」と言い得るものではないか？

A： 「非ホイッグ主義」という表現は、クーンが『科学革命の構造』で科学が進歩することによって実在に対応する真理としての知識へ少しずつ近づいて行くという進歩史観を批判して論じたように、ローティは哲学が進歩していくことによって真理へと近づいているのではなく、時代によって様々なヴァリエーションに変化しているだけであり、むしろ真理へ近づくという考え方を捨てるべきだとするのがローティの理解する解釈学ではないかと考えている。

< 全体の評価 >

本論文は、いくつかの点で問題はあるものの、全体としては、当初の目的を十分果たしているといえる。問題点としては以下のようなことが上げられる。1、分析哲学者として出発したローティだが、その分析哲学 当時、アメリカ哲学界で支配的だった分析哲学を含め についての議論が余りなされていない。2、ローティが扱った多くのテーマを取り上げているのはよいとして、個々のテーマについての議論が平板になっているところが若干見られる。例えば、「公と私の区別」の問題は、内外の多くの論者が取り上げ論争されているが、そうした論争をもう少しフォローし議論する必要があったのではないか。3、ローティの思想に対する執筆者の意見、批判がそれほど見られず、いささか物足りなさを感じる。第 10 章では、ローティのテキストの「深読み」に対しては明瞭に違和感を表明しているが、他のところでもそうした姿勢を見せてほしかった。

しかし、本論文が多くのジャンルからなるローティ思想の全体像を明らかにしたのは、少なくとも我が国におけるローティ研究では初めての成果であり高く評価される。また、本論文のいま一つの目的だったローティ思想の一貫性を明らかにするということも、既に著書『リチャード・ローティ』の中で、ある程度示されていたが、本論文では同著書に第 10 章「ローティの文学論」と第 11 章「ローティの哲学における解釈と真理」が付加されたので、ローティ思想の一貫性がより鮮明に一層説得力をもって明らかにされていて評価できる。更に、ローティは英米だけでなく大陸の多くの思想・思想家も扱っているので、本論文はそうしたことに十分配慮し、随所に思想・学説史的な解説・説明を挿入し読者の理解を多少容易にしている、この点でも評価してよいであろう。そして何と云っても、ローティの独自性を「物語論的転回」にあるとしたことは、ローティ研究史上、本論文が最初であり、まさしく本論文の独創性であって本論文の最大の成果といってよからう。

また、執筆者は＜公聴会＞で、今後の課題として、1、ローティの真理論、認識論、存在論をジェイムズの純粹経験や多元的宇宙などと比較する、2、ローティ思想に依拠しつつ、リベラル/コミュニタリアンという対立軸の脱構築を計る、といったことを上げていたが、もし今後そうした課題に挑戦するならば、本論文の更なる発展が期待される。

何れにせよ本論文は、ローティ研究史上において極めて大きな貢献をなし、また今後のローティ研究はもとより広く政治哲学の研究にも新たな可能性を拓くものといえることができる。

以上を総合的に判断した結果、我々は本論文が「博士（学術）早稲田大学」の学位に値するものと認め、ここに推薦する次第である。

2010年7月7日

主任審査委員	早稲田大学社会科学総合学術院教授	経済学博士（早稲田大学）	古賀 勝次郎
審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授	経済学博士（神戸大学）	東條 隆進
審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授		後藤 光男
審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授	博士（政治学）早稲田大学	厚見 恵一郎
審査員	早稲田大学政治経済学術院教授		齋藤 純一